

〔論文〕

## 福田敬太郎における三元徳と名古屋学院大学のビジョン

高 見 伊三男

名古屋学院大学スポーツ健康学部

### 要 旨

I 福田敬太郎における三元徳 において、1. 信仰について 2. 希望について 3. 愛についての福田の残されたノート他を通して 4. 福田の信望愛の特徴 について考察した。結論として、信・望・愛の三元徳が関連しており、愛が最も大いなるものであることが注目される。II 福田敬太郎における名古屋学院大学のビジョン においては、1. 「敬神愛人」について 2. 「幽玄啓明」について 3. 名古屋について 4. 学院について 5. 大学についての福田ノート等を通して、6. 福田の名古屋学院大学ビジョンの特色 について考察した。結論的にはそうした本学のビジョンの特色が豊かに関連していることが確認された。III まとめ において、本学が「幽玄啓明」に代表される「真の大学」、また「敬神愛人」に代表される特色豊かな大学として名古屋から高く広く飛躍していくことが神からの使命であると確信できた。

キーワード：三元徳，敬神愛人，幽玄啓明，名古屋学院大学，ビジョン

## Three basic virtues and vision of Nagoya Gakuin University in Keitaro FUKUDA

Isao TAKAMI

Faculty of Health and Sports  
Nagoya Gakuin University

---

\* 本稿は、「名古屋学院大学研究助成」(2019-2023：課題型共同研究)の助成を受けた成果の一部である。

## 目 次

- I 福田敬太郎における三元徳
  - 1. 信仰について
  - 2. 希望について
  - 3. 愛について
  - 4. 福田の信望愛の特徴
  
- II 福田敬太郎における名古屋学院大学のビジョン
  - 1. 「敬神愛人」について
  - 2. 「幽玄啓明」について
  - 3. 名古屋について
  - 4. 学院について
  - 5. 大学について
  - 6. 福田の名古屋学院大学ビジョンの特色
  
- III まとめ
  - 1. 福田における三元徳の特徴
  - 2. 福田における名古屋学院大学ビジョンの特色
  - 3. 結論

### I 福田敬太郎における三元徳

本研究は、2019年4月より5年間にわたり「日本におけるキリスト教教育—『敬神愛人』の系譜の探究—」というテーマによる共同研究の一環として取り組んだものである。名古屋学院大学の建学の精神は、その「敬神愛人」であるが、アメリカのキリスト教プロテスタント教会<sup>1)</sup> 宣教師のF. C. クライン博士 (D. D. Frederick Charles Klein, 1857-1926) の創設の名古屋英和学校より継承されて、135年の歴史と伝統を有している。その長い歴史と伝統において、「敬神愛人」の系譜をその5名の代表者 (F. C. クライン, メアリー・クライン, U. G. モルフィ, 内村鑑三, 福田敬太郎)を通して探究していった。こうした5名の代表者を通して研究することによって、「敬神愛人」がどのように具体的に、多様に展開されて来たかを認識して、日本におけるキリスト教教育において「敬神愛人」が果たしてきた豊かな役割と今後の可能性を探求してきた。

さて、その中の福田敬太郎 (1896-1980) が本論のテーマの対象者であるが、福田先生は名古屋学院大学の初代学長 (1964/4-1974/11) であり、また三代目の理事長 (1974/6-1980/1) でもあり、本大学の創立のいわば代表者であった。こうした福田先生における本学の教育・研究などを通しての人格形成の理念について考察するに際して、「福田敬太郎における三元徳と名古屋学院大学のビジョン」というテーマを掲げることにした。

さらにそのテーマの最初に「福田敬太郎における三元徳」として掲げた理由としては、まず一つには本学の建学の精神の「敬神愛人」の系譜において福田がこうした愛—聖書のイエス・キリストの教えに基づく敬神愛人—についてどのように受容していたかが注目される。第二に聖書そして福田においては、代表的使徒パウロが表明しているように (I コリント 13 : 13), 愛は信仰

や希望と不可分な関係にある（詳しくは後述 I 4を参照）。第三には福田が記録していた日記・ノートによると、その全29巻の福田自身による表題のうちで「信望愛」（13巻）「新しい軌道」（2巻）「新しい希望」（19巻）「敬愛」（29巻）といった、信仰や希望や愛、すなわち、三元徳に関する表題のものが目立つからである<sup>2)</sup>。

それゆえに以下において、まず「福田敬太郎における三元徳」について考察していくことにする。なお、以下の福田の引用文において二例ずつ挙げているのは、聖書においては二件以上の証言・証人を要するという事に準ずるからである。

## 1. 信仰について

現在にも引き継がれてキリスト教センターから発行されている「麦粒」（第15号・1974/1/10）において、福田はかつて「信仰の初心」と題して次のように述べている。

『『初心』という時、それは私にとりましては『信仰の初心』であります。そこで私自身がキリスト教信仰をもちました当初のことをあらためて考え、その後どうなったか、今はどうであるか、悔改めるべきものがあれば悔改めねばならない、そういう意味で初心を問い直したいと思います。

・私は旧制中学5年の秋にキリスト教信仰を自分の信仰としてもつということを公けに告白いたしました。・私はその当時茨木教会に出ておりました・

だいたい人間の人格形成は10代になされると言いますが、私も13才頃から18才頃までの間に、将来一人の人間として歩むための基礎が培われたと思います。その頃、茨木中学に通っておりましたが、クラス担任でありました井上先生が毎日のおっしゃったことを今も憶えております。予習、復習、宿習、日誌、これを実行せよ、と非常にやかましく言われました。・この予習、復習、宿題、日誌は当時の少年にとってはmental trainingつまり心的な訓練でありました。・

しかし、mental trainingは確かに必要であります、実はそのmental trainingで私は失望を感じたのであります。人間の人格形成におきましてはphysical trainingというものも必要であります。私は中学時代は剣道をやっておりました。これも人格形成には役立ちました。しかしmental trainingやphysical trainingだけではまだ人間はほんとうにでき上がりません。むしろそこに最終的には失望を感じました。私は中学2年の頃非常に生意気でございまして、先程申しました井上先生にこっぴどく叱られたことがありました。それ以来先生の教えを守りまして模範生になりました。・しかし私自身にはそれだけでは失望のようなものがあつたのです。この失望のような感じは、結局はphysical trainingなりmental trainingだけではほんとうの望みを見出し得なかつたということです。5年生の春頃から私は非常に悩みました。非常に不安な状態が続きました。その時に小学校以前から受けておりました別の訓練、physical training, mental trainingに対しまして仮にこれをspiritual discipline 霊的訓練というふうと呼んでおりますが、それによって私は救われたのであります。

・しかしこの **spiritual discipline** の間に人間といたしましていかなる罪があるかということ  
を明らかにされました。そして自分自身の罪を知りまして、『神は愛なり』と子供の時に  
教えられましたことがほんとうの意味を持ってきました。

『神は愛なり』とはどういうことなのかといえば、『神はそのひとり子を賜うほどに世を愛  
したもう』とヨハネ福音書3章16節に書かれております。・・中学5年の春頃の絶望状態の  
時に、その愛におまえはすगरなくちゃいけないんじゃないか、自分が生きておると思うから  
弱さを感じる、またその自分の罪に非常にさいなまれる、しかしもはや自分が生きている  
んじゃない、自分は主イエスのあがないによって死んだ者である、主によって新しい命を与  
えられた者であるという信仰がはっきりいたしまして、信仰告白をしたのであります。

・キリスト教の信仰生活におきましては『信仰から信仰へ』ということが言われます。  
洗礼を受けたならばもう一人前だと思う人がありますが、これはやはりまちがいです。信仰  
を告白する、洗礼を受けるということはそこから新しい人生に出発するのであって、信仰の  
初歩にとどまることなく信仰から信仰へと進んでいかなければならないと、今朝私は強く思  
うのであります。』

ここには、福田自らの、主に学校での人格形成を通して、**mental training** (心的訓練)  
→ **physical training** (身体的訓練) → **spiritual discipline** (霊的訓練) へと深まり、導かれてきたこ  
とが具体的に省察されている。その最後の **spiritual discipline** (霊的訓練) において、自己の罪す  
なわち「自分の生きていると思うから (の) 弱さ」と同時に「神は愛なり」をほんとうの意味で  
受容することができた。この「神は愛なり」は、聖書に「神はそのひとり子を賜うほどに世を愛  
したもう」(ヨハネ3:16) と具体的に証言されているのだが、「神の(最愛の)ひとり子」とし  
てのイエス・キリストがこの世に降ってくださり、特に十字架の「あがない(贖い)」(犠牲)の  
愛とその報いとしての復活・昇天・父なる神の右の御子・救い主(王)としての着座・執り成し  
を通して、今も私たちをその主による、主と共なる「新しい命」へと執り成しておられること  
を通して、その主キリストへの「信仰」をもって受容・服従していくことができるようになったと  
いうこと、そしてこの信仰はこの世の人間にとっては「信仰の初歩」からさらに「信仰から信仰  
へ」と成長していくものであることが自らの人生にそって信仰告白されている。

また、同じ「麦粒」(第22号・1975/4/23)において、福田は「聖書と人生」と題して次のよう  
にも述べている。

「今週のチャペルは『聖書と人生』という主題で開かれておりますが、今朝は『聖書と私の  
人生』と限定いたしまして話させていただきたいと思います。私が最初に聖書に接しました  
のは書物の形ではなく、聖書に書いてありますことについて子供の時に触れたのであります。  
いろいろな思い出がある中で、一番よく思い出しますことは『主のみことばに従え』という  
ことであります。

・聖書ほど多くの国々の言葉で訳されているものはございません。何故に一つの書物で

ありながらこれほど多くの国々の言葉に訳されているのかと驚くほどです。

・学問の研究においても文献等については一回だけでなく何度もくり返し読まねばなりません、聖書ほどくり返して読むことの必要な書物はないのであります。・先程詩篇119篇9節をお読みしましたが、私は青年時代には文語体で憶えておりました。『若き人はなによりてかその道を清く保たん、み言葉従いてつつしむの他ぞなき』・私は教会に属する者といたしまして旧新約聖書66巻は我々の信仰の基準であり、生活のあやまりなき基準であることを信じ、この聖書のみことばに忠実になるように絶えず努力いたしておりますことを申し上げて、私の所感にかえさせていただきたいと思います。』

この中で福田は、「私は教会に属する者といたしまして旧新約聖書66巻は我々の信仰の基準であり、生活のあやまりなき基準であることを信じ、この聖書のみことばに忠実になるように絶えず努力いたしております」と信仰告白しているように、特にキリスト教プロテスタント教会に属するキリスト教徒<sup>3)</sup>としてまず何よりも聖書を「信仰の基準」また「生活のあやまりなき基準」として受容しているのは注目されることである。その聖書は基本的には前述の「神は愛なり」すなわち「神はそのひとり子を賜うほどに世を愛したもう」について証言している神の言葉であるからである<sup>4)</sup>。

## 2. 希望について

福田における希望についての発言の中で、次のような二つのものを紹介したい。が、結局両者とも同じことを述べていると考えられる。

『若者に希望を与えよ』また『老人に希望を与えよ』といわれる。しかし人々にそう簡単に希望を与えることができるであろうか。大学が沈滞するときに、教職員や学生に vision を示して勇気づけるべきであるといわれ、私はその困難にはたと行詰りを感じることがある。希望とか vision とか夢とかは何であるか。今の若者には夢がないというが、それはいったい何を意味しているか。Boys be ambitious! とクラーク博士は叫んだ故事は有名であるが、実はそれだけでは意味がないのである。クラーク博士は、Boys be ambitious in Christ! とやったことを忘れてはならない。出世だとか地位とか財畜とか名誉とか学問とか発明とか技能とかスポーツ選手権とか、これらは人生の真の希望とはいえない。一種の努力目標として希望といえないことはない。この低次の希望を達成するためにも天賦の才能にその人の絶間なき努力が加わらねばならぬ。いわんや人生の高次の希望を持つためには一層の努力が必要である。しかし真の希望は人間の努力だけでは与えられない。むしろ希望は、神が人間に与え給うものである。人間が他の動物とちがうのはそこにある。人間が希望を持って歩むようになる可能性を与え給うたことから出発しなければならない。従って多くの近代人のように、神を知らず、神を認めない者には初めから希望は与えられない。ある場合には自らを神として行動する不謙遜があって、そこは真の希望は生まれて来ない。ある場合には自分にあいそをつか

して、絶望に陥り、自殺を企てるようになる。不遜の罪と同様に絶望の罪がある。まずこの罪を悔改めて、神に立返るところから出発しなければ人生の真の希望は生まれて来ない。」<sup>5)</sup>

上記において、福田は敢えて「人生の低次の希望」と「人生の高次の希望」とを区別している。それぞれの希望は、絶間なき努力が加わらねばならないものである。しかし両希望のうち特に後者の「人生の高次の希望」は、「神が人間に与え給うものなのである。」すなわち、それはクラーク博士が“Boys be ambitious in Christ!”と言ったことと重なっているのである。この神がキリストを通してキリストと共に与え給う高次の希望は生死を貫いて存続する目標となるものである<sup>6)</sup>。しかし、この高次の希望がないと、我々は往々にして「不遜の罪」あるいは「絶望の罪」に陥りやすい者である。それゆえ、このような「罪を悔改めて、神に立返るところから出発しなければ人生の真の希望は生まれて来ない。」

次の引用は、福田が名古屋学院大学第四回卒業式（1971/3/16）において2068名の卒業生に向けて式辞として述べた内容の一部として注目される。

「この機会に私は特に新しく卒業されましたところの諸君が『人生に対して希望を持っていただきたい』ということをお願いしたいと思います。人間というものは他の動物と違ひまして前途に対して一つの望みをもつというところに人間の特性があります。・・私は絶えず聖書に親しみまして、聖書によりまして与えられておりますところの希望の源泉を今ここに思い出してみなさんにお分ちしたいと思うのであります。ローマ人への手紙の第五章のはじめに、“患難は忍耐を生み出し、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生み出す。”という言葉述べております。まことに私共人生におきまして五十年、六十年と経験をつんでおります間にいかに人生は患難に満ちたものであるかということを経験いたします。諸君もこれから独立して社会に出て働くことになるのであります。今までも経験しておったであろう以上に大きな悩みがおしよせてくることは必至であります。あるいは病気、あるいは貧困、同族の乱、交通事故、患難というものはどういう形であらわれますか、それはさまざまありますけれども患難は必ずおしよせてくる。本来患難の原因は人間の深い罪に由来するものであります。聖書の示すところによりますればその患難を如何にして受け止めるか、その患難の原因でありますところの罪をまず悔い改めて罪から救われる必要があるのであります。そういう罪から救われたところの人々の受けます患難、そこに患難が忍耐を生み出すということに繋がってくるのであります。生まれながらの患難でありますればそれは死に通じます。けれども新しく生き返ったところの人間の患難は忍耐を通しまして練達へ、練達を通しまして希望に繋がるのであります。・・

新しい卒業生諸君はこれから社会に出て、生活設計、家庭設計、さまざまな計画を立ててお進むになるのであります。そこに、最も高い希望がなければ、それらの設計も企画も本当は価値なきものになってしまうのであります。人生の希望の最高の段階は何んであるか、これはパウロの示すところによりますると、“キリストの栄光にあずかる希望。”という



言葉を使っております。我々が人間全体があるいは造られたもの全体がどういうものになるかということとはなかなかそう簡単には解りませんが、しかしながら我々の信ずるところによりますれば、患難を通して忍耐を生み出し、忍耐から練達に至り、練達をもって終わらないで希望に繋がるときに、私共は最終の栄光にあずかることができるのであります。

どうぞ諸君は、名古屋学院大学の卒業生として、その人生最高の希望ということについてお忘れのないように最後に当たりましておすすめをする次第であります。』<sup>7)</sup>

現在の名古屋学院大学の一学年の定員よりもかなり多い2068名の卒業生に向けての式辞において、福田は「いかに人生は患難に満ちたものであるかということ」を強調している。それに対して、聖書の代表的使徒パウロも患難について触れているが、「患難は忍耐を生み出し、忍耐は練達を生じ、練達は希望を生み出す」という言葉を述べている。どうしてこのような希望を抱くことが可能になるのか。「人生の希望の最高の段階」は、「キリストの栄光にあずかる希望」<sup>8)</sup>という「最終の栄光にあずかること」である。すなわちこの希望は、復活の栄光のキリストとなった神の最愛の御子・救い主イエス・キリストが生死を貫く最終目標であるゆえに、信仰者にとっては「キリストの栄光にあずかる希望」という「最終の栄光にあずかること」なのである。

### 3. 愛について

上記のIの序文にも書いたように、本学の建学の精神はイエス・キリストに基づく「敬神愛人」である。この愛の教えは、イエス・キリストの教えの要約ともいえる。こうした愛について、福田はどのように受容したのであろうか。以下の二つの叙述はそうした愛について触れているので、特に注目される。

『神は愛なり』(ヨハネ第一書4:16)。これは私の日曜学校の最初のクリスマスの晩に多勢の前で講誦して叫んだ聖句である。そこで同書4:7-16を読み直して見よう。

キリスト教にいう愛はどんなものであるか？ 単なる仲良しか、いたわり合いか、慰め合いか、そうでない。『友のために生命をすてる』(ヨハネ15:13)。これが最も大いなる愛です。イエスは、『父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました、わたしの中のいとどまりなさい』といわれた。(ヨハネ15:9) 愛は神から出ているものである。それが独り子イエス・キリストによってわれらに示されているのである。

『心をつくし、思いをつくし、知力をつくしてあなたの神である主を愛せよ』

『あなたの隣人を自分と同じように愛せよ』

イエスは、律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっていると教えられた。(マタイ22:30-40) 隣人を愛することは、敵を愛するところに通じる。(マタイ5:44) これがキリスト教の愛である。神の愛はそれほど高く、深いものである。

このような愛を示す言葉は日本語にも、漢語にも、英語にも、およそ人間の言葉ではない。ギリシャ語の  $\eta$   $\alpha$   $\gamma$   $\acute{\alpha}$   $\pi$   $\eta$  は英語で love, benevolence, charity と訳されている。日本

語ではいつくしみ、めぐみ、あわれみということばがあるが、愛、仁、慈ほど深くない。  
“ὁ θεὸς ἀγαπᾷ ἡμᾶς ἐστίν” は訳しにくい語である。その内容は多面である。コリント前書13章参照。〕<sup>9)</sup>

ここには、「神は愛なり」が特に「(その最愛の) 独り子イエス・キリスト」を通して示されている。この愛は、「友のために生命をすてる」(ヨハネ5:13) ことも辞さないような他者本位の「最も大いなる愛」である。

そしてイエスは、「父がわたしを愛されたように、わたしもあなたがたを愛しました、わたしの愛の中にとどまりなさい」といわれた。(ヨハネ15:9) その「わたしの愛の中にとどまりなさい」の要約として二つの戒めが命じられている。

「心をつくし、思いをつくし、知力をつくしてあなたの神である主を愛せよ」

「あなたの隣人を自分と同じように愛せよ」

これは、御子イエス・キリストを、模範とするべき、二つの愛の戒めである。特に「隣人を愛することは、敵を愛するところに通じる」ものでもあり、「神の愛はそれほど高く、深いものである」。

これが、ἡ ἀγάπη (アガペー:新約聖書ギリシャ語) の愛なのである。言うまでもなく、このイエスによる愛の戒めに本学の建学の精神である「敬神愛人」が基づいているのである。

『愛』コリント前13章 (キリスト教大事典参照)

#### 1. キリスト教における愛の位置：キリスト教全体をおおう主題

キリスト教を神と人間との関係としてとらえるならば、愛が人格と人格との関係を意味するゆえに、キリスト教全体が愛の主題においてとらえられることになる。

#### 2. 旧約における愛

神と人間との関係としての愛は、まず神による人間の創造のうちに示される。人間の創造は、愛を本質とする神(ヨハネ4:16)が、自己の愛を受ける者を自己の前に立てたことと解される。創造は、神が一方向的に人間に愛を与えたことである。純粋に与える愛が創造に示された神の愛である。神と創造されたままの人間の間には愛を妨げる何らの障碍もなかった。

しかしこの神の愛は、人間の墮罪によって破られた。アダムの行為が神に対する反道の罪になったのは、神とアダムとの間に愛の関係があったからである。人格的な愛の関係が存在するときだけに、それに対する背反が罪になるのである。神の愛は、そむかれるとき怒りとなる。しかし旧約において神の怒りは完全に解決されておらず、また完全に貫徹されてもいない。このような状態を神の忍耐(ローマ3:25)と名付ける。士師記参照。

この忍耐の期間において神の愛が最も明確に示されたのは、イスラエルの民のエジプト脱出である。出エジプト記。この神の愛に応答すべきことが律法としてイスラエルの民に命じられた。(出20) この律法は、神を愛することに集約された。(申命記6) また隣人を愛することを伴う。(レビ19:18)



### 3. 新約における愛：アガペー

エロースは対象の価値を追求する愛であるのに対し、アガペーは、対象そのものを愛するのである。価値追及的なエロースが自己追及的であるのに対して、アガペーは、他者本位の純粋な愛である。敵をも愛する愛：他者本位であれば、必ず自己犠牲的・自己否定的にならざるを得ない。(ルカ6：32-34) このようなアガペーは、イエス・キリストにおいて実現化している。

神がその独り子キリストを世につかわし、かれを十字架に死なせたことの中に、怒りの対象である罪人を愛する神の自己犠牲的な愛を示そうとする。(ヨハネ3：16, ローマ5：6-10) ここに『メシア思想』が『苦難のしもべ』と結合するに至った。

しかし新約においては、自己犠牲的な愛が決して妥協的なものではなく、他者たる人間の現状を改革する勝利の愛であることが示される。(ピリピ2：9-10)この愛の勝利の具体化が、イエス・キリストの服従と、復活者の霊としての聖霊(ヨハネ20：22)のわざである。罪人の聖化である。

神におけるこのような愛の構造が、人間に対する倫理的戒めとして展開される。

○創造において示された純粋な愛⇔自己中心的な愛

○全身全霊を捧げて他者たる神を愛すること  
○自己を愛するように真実に他者たる隣人を愛すること } 戒めの稔待  
(マタイ22：37-40)

また隣人への愛が自己否定的・自己放棄的でなければならないことは明らかである。(ヨハネ3：16)そしてキリストの死にならってこのように自己を放棄することが、キリストの復活にならって自己を復活することになる。(マタイ16：25)<sup>10)</sup>

ここで注目されるのは、まず1.「愛」は、「キリスト教全体をおおう主題」であることである。その愛の対象は、さまざまな他者に及ぶことになった。2. 旧約(聖書)における愛は、神の愛が、特に人間の創造においては純粋に与える愛として示され、さらに出エジプトにおいて律法としてイスラエルの民に命じられた。(出20)しかしそれらの愛は、神の愛の暫定的なものであり、最終的なものではなかった。3. 新約(聖書)における愛は、アガペー(新約聖書ギリシャ語)の愛と呼ばれているが、「他者本位の愛」「自己犠牲的・自己否定的愛」である。他方、エロース(ギリシャ文化を代表する愛)<sup>11)</sup>は、「価値追及的な自己追及的愛」であるといわれる。そうしたアガペーの愛は、「神がその(最愛の)独り子キリストを世につかわし、かれを十字架に死なせたことの中に、怒りの対象である罪人を愛する神の自己犠牲的な愛」として、さらにはその報いとしてのキリストの復活・昇天・神の右の着座・執り成しを通して、「苦難のしもべ」また「(栄光の)メシア」(救い主=王)として示されている。

こうしたキリストの決定的・模範的愛に導かれて、人間に対する倫理的戒めとして○全身全霊を捧げて他者たる神を愛すること、また○自己を愛するように真実に他者たる隣人を愛すること(マタイ22：37-40)が要約されている。このキリストの決定的・模範的愛に基づく倫理的戒めとして、本学の建学の精神の「敬神愛人」が由来しているのである。

#### 4. 福田の信望愛の特徴

以上において、「福田敬太郎における信望愛（信仰・希望・愛）」について考察してきたのであるが、どうしてまずこういう表題にしたかという理由に関してはすでに「福田敬太郎における三元徳」の序文において述べておいたのでそちらで確認していただきたい。ここでは表題にあるように、4. 福田の信望愛の特徴 ということについてまとめてみたい。

聖書において信仰・希望・愛について示されている代表的な箇所を引用すると、

「それゆえ（ $\nu \nu \nu \grave{i} \delta \epsilon$ ），信仰と，希望と，愛，この三つは，いつまでも残る。その中で最も大いなるものは，愛である。」（コリントの信徒への手紙一13：13）

という代表的使徒パウロの言葉がある。しかし、その言葉を含む段落の見出しが「愛」とあるように<sup>12)</sup>、愛についてはそこで述べられているが、信仰や希望についてはそれほど述べられていない。したがって、信仰と希望と愛との関係やさらには「その中で最も大いなるものは、愛である」については、読者が改めて考察しなければならない。そこでこの度は、上述のような福田における信仰・希望・愛についての解釈を通して、福田の信望愛の特徴について考察してみたいと思う。

まず、福田において「神は愛なり」は、具体的には「神はその（最愛の）ひとり子を賜うほどに世を愛したもう」（ヨハネ3：16）ということである。それゆえ神のひとり子また救い主（王）なるイエス・キリストをまず受容・服従していくことが「信仰」となる。この「信仰」は新しい人生のいわば絶えざる出発点といえる。またこうした主キリストについて証言している聖書は、「信仰の基準」と言える書物なのである。

また、福田において「人生の高次の希望」は、「神が人間に与え給うものなのである。」さらには、それは使徒パウロが“キリストの栄光にあずかる希望、”という言葉に具体化される。「人生の希望の最高の段階」は、“キリストの栄光にあずかる希望、”という「最終の栄光に与ること」である。すなわちこの希望は、復活の栄光のキリストとなった神の最愛の御子・救い主イエス・キリストが生死を貫く最終目標であるといえるものなのである。

そして福田において、「神は愛なり」は、特に「（その最愛の）独り子イエス・キリスト」を通して示されている。この愛は、「友のために生命をすてる」（ヨハネ15：13）ことも辞さないような他者本位の「最も大いなる愛」である。またこうした御子イエス・キリストを模範・導きとすべき、二つの愛の戒めが示された。すなわち、「心をつくし、思いをつくし、知力をつくしてあなたの神である主を愛せよ」（敬神）と「あなたの隣人を自分と同じように愛せよ」（愛人）である。特に「隣人を愛することは、敵を愛するところに通じる」ものでもあり、「神の愛はそれほど高く、深いものである」。このように、「愛」は「キリスト教全体をおおう主題」である。その愛の対象は、さまざまな他者にまで及ぶ。また旧約（聖書）における神の愛は、暫定的なものであり、最終的なものではなかった。そして新約（聖書）における愛は、アガペー（新約聖書ギリシャ語）の愛と呼ばれているが、「他者本位」「自己犠牲的・自己否定的愛」としてキリストの十字架と復活を通して保証されている最終的な神の愛である。

こうした福田における「信仰」と「希望」と「愛」についての解釈を通して、福田の信望愛の特徴について指摘できるのは、まず、「信仰」も「希望」も「愛」も神の（最愛の）ひとり子また救い主（王）なるイエス・キリストにそれぞれに関わっているということである。あるいは人生・生死の絶えざる出発点として、目標として、また他者本位的な対象として、まず神の（最愛の）ひとり子また救い主（王）なるイエス・キリストに関わっている。それゆえ、「信仰」と「希望」と「愛」はこうした十字架から復活されたキリストとの不可分な関係において、「この三つは、いつまでも残る」（前出引用）。こうした意味において、「信仰」と「希望」と「愛」はそれぞれとして不可分な関係にあることになる。

しかしながら、これらのうちで「愛」は、神の（最愛の）ひとり子また救い主（王）なるイエス・キリストに関わっているのみならず、さまざまな他者に関わることを可能にする。この「愛」は敵（すべての罪人なる敵!!）のために十字架上に生命をすてることも辞さないような他者本位の「最も大いなる愛」なのである。こうした「愛」を要約するものとして、御子イエス・キリストを模範・導きとするべき、二つの愛の戒めなる「敬神愛人」が示されていることについて福田も繰り返し触れているわけである。

こうした福田における信望愛は、またキリスト教のなかでもプロテスタント（新教）的な人格形成上の徳目であるといえる。他方、ローマ・カトリック教会（旧教）の教義では「七元徳」が一般に認められているのだが、それは聖書における信仰・希望・愛（対神徳）と古代ギリシア文化における知恵・勇気・節制・正義（枢要徳）という七つの基本的徳目を含んでいる。それに対して、本名古屋学院大学や福田もその流れにあるプロテスタント（新教）では聖書における信仰・希望・愛は三元徳としてその基本的関係が認められているが、他の徳目については一般に認められるには至っていない。プロテスタント（新教）は何よりもまず聖書を正典として重視しているのである。福田がそうしたプロテスタント（新教）の教会また大学においても多大なる貢献を尽くしたことは前述したとおりである<sup>13)</sup>。

## II 福田敬太郎における名古屋学院大学のビジョン

### 1. 「敬神愛人」について

前述の4. 福田の信望愛の特徴 において、福田がいかに聖書（特に使徒パウロ）において人格形成に重要な三徳として指示されている信仰と希望と愛の不可分な関係について、特にその中の「最も大いなる愛」について重視していたかを考察してきたのであるが、こうした使徒パウロにおける愛と御子キリストに基づく「敬神愛人」の愛とは、親密な呼応関係にあるといえる。以下において、福田が御子キリストに基づく敬神愛人について本名古屋学院大学においてどのように受容していったかを見てみたい。

以下の福田のメッセージは、本大学の第二回入学式の式辞のなかの一部である<sup>14)</sup>。

「申すまでもなく、名古屋学院大学は、輝やかしき名古屋学院の歴史の背景のもとに昨年新

しくできました大学であります。その場合において、この大学は一つの国籍をもっておる。一つの船籍をもっておるのであります。・・・

それは、名古屋学院そのものが、従いまして、名古屋学院大学がキリスト教主義の教育機関であるということでもあります。そういうナショナリティー、そういう一つの性格をもって我々は存在しているのである。そういう船に諸君は乗り込んできたのであります。これを私はこの機会に重ねて諸君が思いおこす人もありましょうし、また新しく覚悟していただく必要があることと思うのであります。・・・

一体我々の船は何処に行くのであるか、マストの上に高くその船が行く港、あるいは国を示すのであります。一体名古屋学院大学は全体としてどちらを向いて進んでいるのであるか、それぞれの乗客は何処に上陸するためにこの船に乗ったのであるか、この船はその船籍が明らかにしておりますと同時に、そのデスティネーションをはっきりと示しているのであります。

我々は一つの目標をかかげておる。この諸君が講堂に入りまする前に、多数の人は気づいていると思いますけれども、『敬神愛人』という言葉が額にかかげられております。神を敬い、人を愛するというこの標語が、我々の名古屋学院大学の永遠の目標である。すべての人に共通の目標としてこれを示しているのであります。したがって、一人ひとりもまた、その同じ目標をもって進んでいただかなければならないのであります。

一旦船に乗りました以上、そうして航海を続けまする以上は、一つの運命共同体であります。」

ここで船の航海のたとえが語られている。その船は名古屋学院大学であるのだが、他の第一回入学式式辞ではそのドッグは名古屋学院という想定である。名古屋学院については「輝かしい名古屋学院の歴史の背景のもとに」とあるように当時（1965/S.40）78周年を迎えていた。さてその船は一つの国籍・船籍をもっているわけであるが、当大学は「キリスト教主義の教育機関」という、名古屋学院と共通の籍がある。ここで「キリスト教主義の教育機関」とは天国（神の国）の復活のキリストの下にある学校ということが言える。

しかも、その船はそのデスティネーションとして一つの目標をかかげておる。それがすなわち「敬神愛人」であるが、やはり名古屋学院と共通の建学の精神なのである<sup>15)</sup>。そしてこの「敬神愛人」について、「神を敬い、人を愛するというこの標語が、我々の名古屋学院大学の永遠の目標である。すべての人に共通の目標としてこれを示しているのであります」と述べていることが注目される。すなわち、この「敬神愛人」は永遠にすべての人にとって重要な、基本的な関係についての神の御子による指令なのである。前述の使徒パウロの言葉では「最も大いなる愛」なのである。すなわち、御子キリストを模範また目標として仰ぎながら、その天地の主なる父なる神を敬愛・礼拝し、それに基づいてさまざまな隣人を自分のように仕え・愛するという目標が掲げられているのである。

また、開学式式辞においては次のようなメッセージが注目される。

「最後に、この記念すべき日に、私は学長の重責を負うものとしたしまして、自ら省みて強く決意をかたくすると同時に、みなさまと共に前途に向けて、大きい希望に胸をふくらませたいのであります。我々は、すでに声明されましたように、キリスト教主義による名古屋学院の一貫教育の理想を完成すると共に、名古屋を中心とする中部経済圏のわが国全体における役割の躍進に備えまして、必要な人材を供給することにより、この地域社会にできるだけ貢献をなし、ひいては、日本の経済成長を通して、敬愛同窓の国際文化に寄与するにいたることを目的として、この大学の経済学部を開いたのであります。・・

今や、私達は、その第一歩を踏みだしました。焦らずに、しかし着実に、前途に向けて進むではありませんか。いま、この瞬間に、ここに新しい名古屋学院大学旗が樹立されようとしております。この地色は、まもなくご覧になりますように、赤誠を示す紅梅の色によるもの、そのなかに平和の象徴である橄欖でつまれた名院大学の文字、即ち、大学の紋章を示し、旗竿の先端には若さに溢れる学生の前途を約束する桜の蕾をおいております。これは、名古屋学院の中学校・高等学校の校旗と共通の名古屋学院精神を表わすところの大学旗であります。

我々は、この大学旗のもとに、一致結束して、洋々たる前途に向けて邁進しようとしております。」<sup>16)</sup>

この中で注目されるのは、まず「キリスト教主義による名古屋学院の一貫教育の理想を完成する」ということである。同一法人の名古屋学院としては、中学校・高等学校との一貫した最後の大学として、キリスト教主義教育を完成するという重い使命に触れているのである。これは、名古屋学院と名古屋学院大学とが法人分離（1973/3）する以前の時期であったので<sup>17)</sup>、そのような使命に触れられている事情も考えられるが、法人分離後においても建学の精神「敬神愛人」などの根本的に共通な部分もあるゆえに、両者が今後もそれなりの近しい、親しい関係があつて然るべきであると思われる。

また、「敬愛同窓の国際文化に寄与するにいたることを目的として」は、敬愛同窓の会員が国際的に活躍することを願っていると考えられる。ちなみに、現在では本名古屋学院大学に「国際文化学部」が増設されているのは、福田の預言の結果といえるであろうか!!

さらに名古屋学院大学旗について触れているが、それは名古屋学院の旗と共通する部分がある。両旗における地色の真紅の色、それぞれの文字をつつんでいる橄欖などである。それらは、「赤誠心（真心）をもって平和を抱く」ということを象徴していると解説されている。両法人に共通の「敬神愛人」の敬愛に相応しい旗であると考えられる。

## 2. 「幽玄啓明」について

上記の1. 「敬神愛人」について、では、本名古屋学院大学が名古屋学院と共通の建学の精神「敬神愛人」を、両法人の分離前（-1973）は言うまでもなく、分離後（1973-）も引き続き継承していったのであるが、ただし、その分離は大きな節目となった。その分離への一つの大きな対応が



福田の第二の建学の精神の提唱であった。

以下のメッセージは、「麦粒第7号」(1972/3/10)に「我々にとって建学の精神とは何か」という表題で語られた、福田の注目すべき提唱である。

「アメリカの一人の宣教師が名古屋で伝道を開始いたしまして、それが一粒の種になって学院ができてきた。その建学の精神を標語的に言表わして、『敬神愛人』という言葉で我々に伝えられております。しかし、その『敬神愛人』という言葉で表わされておりますキリスト教精神が、ほんとうに現在我々の内に生きているかという事が問題であり反省しなければならないことと思います。しかし私は、そうした言わば伝統的な言習わしになっております建学の精神というものでは満足しないで、8年前にここに名古屋学院大学が建てられた、その大学の者として大学の建学の精神とは何かを考える必要があると思います。・・・

この点について、私はある時に一つの言葉を作りまして、キリスト教精神、キリスト教主義を表わすための標語になるということで披露したことがございます。それは『幽玄啓明』という言葉であります。・・・真理は本来隠されているものである。従いまして『幽玄』という言葉がそれに当てはまると私は考えております。隠されている真理を追究するということに大学といたしましての使命がありますし、また喜びもあるわけです。ちょっと本を開けばすぐに分かるような事を私共は真理とは考えません。本を開いてもすぐには分からないということに真理がある。隠されたものを求めるということに大学の本来のあり方があるように思います。それが大学として真理を追究するという意味であります。それは世俗の大学でも実は同じであるはずで。ではキリスト教主義の大学にどんな特色があるのかと申しますと、私はそこに真理自体が啓明するという面があるということをお忘れにはならないと思います。・・・キリスト教におきましては、先ほど申しましたようにイエス自ら『我は道なり、真なり』として己をこの地上に現されました。キリストが現れたということは神がこの地上に現れたということである。我々は神をそう容易に掴むことができません。しかし、キリストが肉体をもって地上に現れたということによって神が啓示される。これは旧約聖書を通じまして神がこの地上に現れるということについての長い間の預言があり、それに対する待望があったのでありますが、そういうところに真理は自らを啓明するものである。ほんとうに求める人々の前に真理は現れます。教会というものは、そうした真理の現れること即ち真理の啓明をそれ自体示しております。世俗の大学は隠されたところの真理を人間の力で営々として求めている。教会は真理自体がここにあるということを示している。キリスト教主義の大学というものはその接点に立っているものと私は考えます。そこに名古屋学院大学がキリスト教主義の大学であるという特色を示さなければならない。」

ここでまず福田は、「その『敬神愛人』という言葉で表わされておりますキリスト教精神が、ほんとうに現在我々の内に生きているかという事が問題であり反省しなければならないことと思います」と反省を促し、そして「しかし私は、そうした言わば伝統的な言習わしになっておりま



す建学の精神というものでは満足しないで、8年前にここに名古屋学院大学が建てられた、その大学の者として大学の建学の精神とは何かを考える必要があると思います」と新しい大学の建学の精神について考える必要があることを訴えている。この発言の時は1972年3月あたりなので、法人分離の1年程前に当たる。「問題」の「反省」を促しているのは、特にそれまでの名古屋学院の経営の甘さを暗示していると考えられる<sup>18)</sup>。

そしてその新しい大学の建学の精神として「幽玄啓明」が提示されているのである<sup>19)</sup>。その意味としては、「教会というものは、そうした真理の現れること即ち真理の啓明をそれ自体示しております。世俗の大学は隠されたところの真理を人間の力で営々として求めている。・・キリスト教主義の大学というものはその接点に立っているものと私は考えます。そこに名古屋学院大学がキリスト教主義の大学であるという特色を示さなければならない」と結ばれている。すなわち、「教会」(キリスト教主義)は「(御子イエス・キリストに代表される)真理の啓明をそれ自体示しており」、「(世俗の)大学」は「隠されたところの真理を人間の力で営々として求めている」。その接点に立っているのが、キリスト教主義の大学である名古屋学院大学の特色なのである。

そうした絶えざる真理の追究に基づいて、福田はその後特に大学の絶えざる改革について呼びかけていくのだが、これについては改めて4. 学院についてにおいて論じることとする。

「真理の探究を任務とする大学の立地と環境とは、その教育効果なり研究成果に大きな影響を及ぼすものであることは明らかである。昔から寺院建立のためには、地を相して適所が選ばれ、そこに修法と勤行とにふさわしい建築物が設けられ、今に至るまで文化財としての高い価値をしめしている。現代にあっては、大学こそ、真理探究の場所として、同じ精神をもってその立地と環境とに留意しなければならない。

名古屋学院大学は、その創立の日から総合大学として将来の大発展を予期して、永住の校地を瀬戸品野台に定めていた。そこは自然と文化の接触する地点であり、幽玄がおのずから啓明するところである。・・

体育施設も恵まれた環境につつまれて装備される。濃尾平野を眼下に展望することができる場所に学生と教職員とが共に飲食し歓談するにふさわしいホールが設けられ、学園生活にふさわしいホールが設けられ学園生活にやわらぎとうるおいとを与えるように工夫される。前庭の池に鱒を養うことができれば、どんなにか楽しいことであろう。

大学の立地と環境とを考慮し、必要な諸施設にこれほど深い注意を払っているものがどこにあるか。・・大都会のまん中にあるマンモス大学に至っては、職業訓練所としては兎も角、これが真理探究の場であるとは到底考えられない有様である。」<sup>20)</sup>

ここでは、福田は「真理の探究を任務とする大学の立地と環境とは、その教育効果なり研究成果に大きな影響を及ぼすものである」と主張している。その大きな影響を考慮して、「名古屋学院大学は、その創立の日から総合大学として将来の大発展を予期して、永住の校地を瀬戸品野台に定めていた。」すなわち、「そこは自然と文化の接触する地点であり、幽玄がおのずから啓明す

るところである」からである。さらに、「大都会のまん中にあるマンモス大学に至っては、職業訓練所としては兎も角、これが真理探究の場であるとは到底考えられない有様である」と、批判的である。福田は、「将来の大発展を予期して、永住の校地を瀬戸品野台に定めていた」とあるように、本名古屋学院大学の理想像として瀬戸品野台における郊外型大学像を描いたわけである。

このことについての議論はさまざまあると思われるが、結果として本学はそれから41年以降には大学のほとんどの施設が名古屋キャンパスに移転することになっていった。大学の教育的・研究的また社会的影響はともかく、経営的に郊外型は立ちいかなかったからである。私的な見解として、本学は、郊外型と都心型とはそれぞれの魅力また利点があり、時代の流れも考慮して併用していくのが望ましいと思われる。

福田も、「大学の絶えざる改革」について呼びかけていったので、そのような自身の大学像の理想像も考え直す余地を含んでいたと考えられるのである。

### 3. 名古屋について

福田は、名古屋学院大学の「名古屋」についてはどのように考えていたのであろうか。

「思うに、現代の大学は、象牙の塔ではなく、生きた一つの社会的制度である。名古屋学院大学は、中京地域社会に根を下し、そこに現実に要望されているところの有能な人材を養成することを第一の使命とする。国際経済社会の今後の発展のうちにあって、日本の産業経済は、ますます新しい動向を求めることを余儀なくされ、それに伴って中京経済圏が重要な役割を果たさなければならない時に、名古屋学院大学経済学部の開設は、きわめて意義深いものであるといわなければならない。」<sup>21)</sup>

ここで注目されるのは、「名古屋学院大学は、中京地域社会に根を下し、そこに現実に要望されているところの有能な人材を養成することを第一の使命とする」のであり、「国際経済社会の今後の発展のうちにあって、日本の産業経済は、ますます新しい動向を求めることを余儀なくされ、それに伴って中京経済圏が重要な役割を果たさなければならない時に、名古屋学院大学経済学部の開設は、きわめて意義深いものである」。そのように「中京地域社会に根を下し」、「中京経済圏が重要な役割を果たさなければならない」といわれる中京地域・経済圏の中核が名古屋であることは言うまでもない。

「最後に、この記念すべき日に、私は学長の重責を負うものといたしまして、自ら省みて強く決意をかたくすると同時に、みなさまと共に前途に向って、大きい希望に胸をふくらませたいのであります。我々は、すでに声明されましたように、キリスト教主義による名古屋学院の一貫教育の理想を完成すると共に、名古屋を中心とする中部経済圏のわが国全体における役割の躍進に備えまして、必要な人材を供給することにより、この地域社会にできるだけ貢献をなし、ひいては、日本の経済成長を通して、敬愛同窓の国際文化に寄与するにいた

ることを目的として、この大学の経済学部を開いたのであります。・・

名古屋学院は品野台に三十六万坪の用地を持っております。そこに、完全な施設を配置することが夢みられつつあるのであります。」<sup>22)</sup>

ここには明確に「名古屋を中心とする中部経済圏」と言われているのだが、また「わが国全体における役割の躍進に備え」とか「この地域社会にできるだけ貢献をなし、ひいては、日本の経済成長を通して、敬愛同窓の国際文化に寄与する」とも述べられており、名古屋を中心として敬愛同窓の国際文化に及ぶ同心円的な広がりを視野に入れているのである。

#### 4. 学院について

学院は、元々、ヨーロッパではschola（ラテン語）に由来したキリスト教の修道院を意味し、また日本ではキリスト教プロテスタントのキリスト教主義学校の総合的な学校組織を意味したと言われている<sup>23)</sup>。本名古屋学院大学の学院について福田はどう思い描いていたのだろうか。

次の引用文は、第2回大幸祭（19666・1-5）に際しての福田学長のあいさつ「常に改革される大学たれ」の全文である。

「名古屋学院大学の開学第3年を迎え、経済学部の中に経済学科と相並んで商学科が設けられ、学生数が1300名を越えるに至ったこのときに、第2回大幸祭が催されることは、まことに有意義である。本学は、まだ新しく、未完成である。成長率指数は、どの指標を用いても、驚くべきものがある。決して安定していない。一切が流動的である。しかしそこに大きな希望が湧いて来るのではないか。

本学は、プロテスタントのキリスト教主義をもって教育の基本方針としている。ローマ・カソリックのキリスト教に対しては、宗教改革を通して新しい信仰を与えられた陣営に属している。われわれは宗教改革の子孫であらねばならない。“ecclesia reformata semper reformanda” 改革は不断になされなければならない。しかし今日のプロテスタント主義の大学が、はたして真に絶えず改革されつつあるか。

プロテスタント主義の大学といいながら、餘にも世俗化しつつあるのではないか。そのことは日本ばかりではなく、キリスト教国を自認している他の諸国を通じて一様にいえることである。キリスト教主義大学が“この世”の大学と変わりなきものになりつつあることを、このまま見過ごしてよいであろうか。

“universita reformata semper reformanda” 哲学においても、科学においても、今日われわれは多くの“unfinished reformation”の事実遭遇しつつある。このことを思うとき、今年の大幸祭のテーマは、その標語を選択した委員たちの本心はわからないけれども、その含蓄はまことに深いものがあると思う。

願わくは、名古屋学院大学をして、永遠に改革されつつ進む真の大学たらしめよ！  
“Nagoya Gakuin universita semper reformanda!”これが今年の大幸祭テーマについての私の解

積である。」<sup>24)</sup>

福田は、本学の学院について、「本学は、プロテスタントのキリスト教主義をもって教育の基本方針としている。ローマ・カソリックのキリスト教に対しては、宗教改革を通して新しい信仰を与えられた陣営に属している。われわれは宗教改革の子孫であらねばならない。“ecclesia reformata semper reformanda” 改革は不断になされなければならない」と強調している。特に、「プロテスタントのキリスト教主義をもって教育の基本方針としている」また「宗教改革を通して新しい信仰を与えられた陣営に属している。」それゆえ、「われわれは宗教改革の子孫であらねばならない。」「“universita reformata semper reformanda” 改革は不断になされなければならない」と再確認しているのである。最後に「願わくは、名古屋学院大学をして、永遠に改革されつつ進む真の大学たらしめよ！ “Nagoya Gakuin universita semper reformanda!”」と、願いあるいは祈りを表明しているのである。

「われらの名古屋学院大学は、今や第10周年を迎え、大学祭としても回を重ねること9回に達した。このあたりで大学全体として新風を起し、新生面を開くべきであろう。これまでは設置者の理事会が弱体であって巨額の負債に喘いでいたが、幸にこの学年の初めから大学が独立の法人格をもって局面を打開する機会を与えられるに至った。まさに今こそ体質を改善して将来の一大飛躍に備えなければならない。

品野台のキャンパスは常に清澄な空気に包まれている。都塵を離れた校庭に太陽がさんと照りわたり、自由と愛とが溢れるふさわしい環境である。私はかねてから一つの愛好することばを持っている。それは幽玄啓明である。大学は、人々が幽玄すなわち真理を追究啓明するところであり、同時に真理そのものがそこに自らを現わすところである。われらのキャンパスは、幽玄啓明にふさわしい環境である。

NGUと姉妹関係を持っているアラスカ・メソジスト大学の標語は『真理はすべてを征服す』であるが、私のいう幽玄啓明は、これをラテン語流に表わすならば、『真理はすべてを照らす』となる。私は、大学を征服する力としてではなく、遍照光明の愛の精神として展開すべきだと信ずる。

プロテスタティズムに立っているわれらの大学は『改革された大学』であると同時に『常に改革される大学』でなければならない。若干の形式的要件を確守するとともに、日々に新しく改革されなければならない。パウロのいったように、われらはこの世と妥協してはならない。むしろ心を新たにすることによって、造りかえられ、何が神のみ旨であるか、何が善であって神に喜ばれ、かつ全きことであるかを、わきまえ知るべきである。

第9回大学祭に際して、新局面を展望しつつ、NGUの発展を祈る。」<sup>25)</sup>

福田は、当名古屋学院大学学長また名古屋学院理事会の一メンバーとして、「これまでは設置者の理事会が弱体であって巨額の負債に喘いでいたが、幸にこの学年の初めから大学が独立の法

人格をもって局面を開く機会を与えられるに至った。まさに今こそ体質を改善して将来の一大飛躍に備えなければならない」と真摯に反省の弁を表明している。

そうした改善のための標語が、福田が繰り返し提示している「幽玄啓明」なのである。これに基づいて本学は「幽玄すなわち真理を追究啓明するところであり、同時に真理そのものがそこに自らを現わすところである。われらのキャンパスは、幽玄啓明にふさわしい環境である」と自画自賛している。

しかもこうした幽玄啓明に基づいて、「プロテスタティズムに立っているわれらの大学」は「改革された大学」であると同時に「常に改革される大学」でなければならない。このように、「日々新しく改革されなければならない」ことは、聖書の代表的使徒のパウロも所々に述べていることである<sup>26)</sup>。

## 5. 大学について

名古屋学院大学の「大学」については、福田はいかように構想していたのであろうか。以下の二つの文章が注目される。

「しかしながら、我々は、名古屋学院大学を、単に経済学部経済学科のみの単科大学的存在から一日も早く一步前進することを期待しております。大学設置審議会に提出いたしました書類のなかでも述べましたように、最もはやい機会において、経済学部のなかに経済学科とあい並んで、経営学科又は商学科を設置し、現代経済社会の強い要求に応ずることを企画しております。

それは、やがて名古屋学院大学が、経済学部と経営学部又は商学部とをもつ、複合大学となることを目指すものであります。

名古屋学院大学は更に真の総合大学となることを志しております。真の大学は、あらゆる学問の総合の府でなければなりません。今は、社会科学の一部門から出発しておりますけれども、人文科学ならびに自然科学の各分野に亘って整備された総合大学になることを、少なくとも、半世紀の長期計画としてもつことを要するのである。

大学学部の研究と教育とは、付属図書館と付置研究所の完備によりまして、その十全な効果を発揮するものであります。その意味におきまして、大学付属図書館の充実は、大学発展の緊急の要件であり、大学付置研究所の確立もまた、大学進歩の必須の要件であります。

名古屋学院は品野台に三十六万坪の用地をもってあります。そこに、完全な施設を配置することが夢みられつつあるのであります。

しかし、大学の真実の構成要素は、土地でもない、建物でもない、いうまでもなく人であります。

優秀な教員組織と能率的な事務組織とをもち、そこに年々歳々、前途頼もしき学生達を迎えることによりまして、立派な大学ができます。その学生達が卒業して、有力な同窓生が累積することによりまして、大学の加速度的な発展が期して待つことをみるのであります。」<sup>27)</sup>



本大学の将来構想として、福田はまず、「経済学部経済学科のみの単科大学的存在」から「経済学部と経営学部又は商学部とをもつ、複合大学」、さらに「真の総合大学」を志している。この真の総合大学は、「あらゆる学問の総合の府」として、「今は、社会科学の一部門から出発しておりますけれども、人文科学ならびに自然科学の各分野に亘って整備された総合大学になることを、少なくとも、半世紀の長期計画としてもつことを要するのである。」また、「大学学部の研究と教育とは、付属図書館と付置研究所の完備によりまして、その十全な効果を発揮する。」そうした「完全な施設を配置する」ために、「名古屋学院は品野台に三十六万坪の用地をもっております。」

しかし、「大学の真実の構成要素は」、何より「人」である。「優秀な教員組織と能率的な事務組織」と「年々歳々前途頼もしき学生達」また「有力な同窓生が累積」によって、「大学の加速度的な発展」が期待されるのである。

これらのなかには現在において、総合大学化や付属図書館と付置研究所の完備、また優秀な教員組織と能率的な事務組織や年々歳々前途頼もしき学生達や有力な同窓生の累積など実現されつつあるものもあるが、品野台の三十六万坪の用地の使用用途をめぐってむしろ縮小しつつあるものもある。今後の更なる長期的・総合的な検討が求められるであろう。

#### 「永久の大学」（大学の永久性）

1964年春四月、待望の名古屋学院大学はついに誕生しました。それは大きな船渠で建造された新しい船舶が処女航海に出で立つような喜びと望みとに溢れています。77年の光輝ある歴史を背景に持つ名古屋学院がこの新造船のドッグであります。この新造船は、一万を越える敬愛会同窓と数千の父兄との熱心に支えられたために、比較的短期間に立派に建造・艤装されました。残されたのはこれからの航海の困難と愉快とであります。

大学は、真理の探究と人材の養成とを使命としています。これは永遠の仕事であり、不断のわざであります。今スタートしたばかりのこの小さな大学は、何ほどのことができます。しかし現在のことだけを見てはなりません。眼を遠くに放って行く手に何が現われるかを展望することが大切であります。船は大海を走っているときでも、恰も同じところにとどまっているように見えます。

わが國に『大学』という制度が出来たのは、大宝令によって始められたと伝えられています。それは第8世紀の初めのことでありますから、ヨーロッパにおける大学の起源よりも古いことができます。それが何故にヨーロッパの大学はその後数世紀の間次第に繁栄して今日の盛大を来したのに対し、わが國の大学は平安時代の初めに最盛期を迎えたが、平安の末期に実質的に全く亡びてしまったのであるか？

明治維新以後、再び欧米の大学の制度が取り入れられて今日に至り、現在では国公立立合せて数百の大学が発生している有様であります。これはやがて淘汰されて、真に正しい大学だけが永久に残ることになると思います。

この数年の間は、大学生の急増によって大学の拡張が要望されています。将来においても



わが国には大学は教育機関として大規模に経営されなければならないと信じます。しかし大学が真に存在の意義を見出すためには、真理の探究研究期間としてのfunctionを果たすことをつとめなければなりません。

名古屋学院大学は経済学部経済学科として動き出しました。それは数年のうちに経営学科を設け、やがて経済学部と経営学部とが並立するものとなり、進んで法学部や（文学部または）社会学部を設置するようになるでしょう。しかし大学としては、一方において文学部を、他方において理学部をしっかりとものに育て上げなければなりません。それに前後して工学部、医学部、薬学部、栄養学部etc.をつくるのが期待されています。

品野台に総合大学が実現するのは何時のことでしょうか？ それは何十年かかっても必ず『永久の大学』の歩みのうちには実現されなければならないことであります。』<sup>28)</sup>

ここで福田は、「永久の大学」（大学の永久性）と題して、本大学の壮大なビジョンの方向を指し示していることが注目される。まず大学の使命として「真理の探究と人材の養成とを使命としています。これは永遠の仕事であり、不断のわざであります」と挙げている。次に、古今東西の大学の歴史の評価を通して、「真に正しい大学だけが永久に残る」ためには「大学が真に存在の意義」を見出して「真理の探究研究機関としてのfunctionを果たすことをつとめなければなりません」と持論を繰り返し展開する。そのための具体的構想としてここでも「品野台に総合大学が実現」することにより詳しく触れている。そうした本学の構想は、「それは何十年かかっても必ず『永久の大学』の歩みのうちには実現されなければならないことであります」と熱く展望しているのである。

## 6. 福田の名古屋学院大学ビジョンの特色

以下の二つの文章は、福田が「蛍雪時代」という高校生向けの全国受験誌に投稿したしたものである。そこでは全国の多くの国公私立の大学が紹介されるなかで、福田はどのように本名古屋学院大学の特色について訴えたのであろうか。

まずは「わが大学を語る―旗幟を鮮明に所信を勇敢に一」と題した内容が、次に「わが大学を語る―ここに大学がある―」がアピールされている。

「私は、名古屋学院大学というひとつの私立大学を、その創立の日から八年間、いわばその幼児期に保育者として看護って来たが、その間、いちばんたいせつだと思って心掛けていることは、常に大学の旗幟を鮮明にし、特色を発揮することである。

すでに数十年の歴史を持つ大学であれば、伝統もあり評判もあって、たんにその名称だけで評価が行なわれるけれども、新設大学はそうでない。なんのために大学が創立されるかということ、設置者自らはっきり意識し、世間にたいしてそれが表明されなければならない。

多くの古い大学がゆきづまって、その改革の声があがってすでに相当の時日が経過したけれども、現にどれほどの改革が行なわれたかを反省するときに、大山鳴動して鼠一匹の感じ

がしないでもない。実際、改革ということはむずかしいものである。

改革を必要とするものと同型のいまひとつの大学ができるということはまったく無意味である。最近数年間に、わが国には国公立の大学の数は、雨後の筍のように増加した。大学という言葉が非常に広い意味で用いられ乱用されていることはまことに遺憾である。人為的に大学基準を作ってその規格に合ったものを公認するという現在のやり方では到底真の大学はできないと思う。

私は、名古屋学院大学の存在の理由を現代の無神論に挑戦し、有神論的立場に立って、すべての学問を再検討することに求めている。それはあまりにも大きい課題である。

しかし、キリスト教主義を標榜する大学は、この大きい使命と責任とを感じなければならない。キリスト教主義大学の世俗化が事実であるこんにち、とくにこういう時代錯誤的に見える要望を出す必要を痛感する。

旗幟を鮮明にし、所信を勇敢に表白することが教育者として、また研究者として大切である。」<sup>29)</sup>

福田は、まず、「私は、名古屋学院大学というひとつの私立大学を、その創立日から八年間、いわばその幼児期に保育者として看護って来たが、その間、いちばんたいせつだと思って心掛けていることは、常に大学の旗幟を鮮明にし、特色を發揮することである」と切り出している。そして、その旗幟また特色として以下に一つのことだけを挙げている。他の本学のビジョンについても他所でいくつも挙げているのであるが、ここでは字数の制限からか、ただ一つのビジョンだけを鮮明にし、表白している。

それは、「私は、名古屋学院大学の存在の理由を現代の無神論に挑戦し、有神論的立場に立って、すべての学問を再検討することに求めている。それはあまりにも大きい課題である。しかし、キリスト教主義を標榜する大学は、この大きい使命と責任とを感じなければならない。キリスト教主義大学の世俗化が事実であるこんにち、とくにこういう時代錯誤的に見える要望を出す必要を痛感する」という大きな課題・使命・責任である。「有神論的立場」とか「キリスト教主義」とは、本学の場合キリスト教プロテスタントとして聖書に基づき改革的であることは、すでに処々に触れたとおりである。

「学問の道はけわしい細い道である。ネオンが輝いて、何がどこにあるか、子どもにもすぐわかるようなものではない。

学者は、そのまっくらな道で、暴風雨の吹きすさんだような怖しさの中で、進むこともならず、退くこともできないで、ただ茫然とたたずんでしまうようなことさえある。真理の追究ということが、いかに困難なことであるかは、真剣に学問の道を歩み初めてわかることであり、一生を学問に身を捧げた者のみか知り得る体験である。大学はそういう人々を中心として構成されている協同体である。

かなり以前から、大学のてん落ということがいわれている。わが国にも、大学と名のつく

機関は、驚くほど多数になっているけれども、どこに真実の大学があるのか。名古屋学院大学は、新しい大学として五年ほど前にスタートしたばかりであるから、まだでん落するには早過ぎる。それでは真実の大学になりつつあるか。

NGUには、ビジョンがある。それは福音主義キリスト教信仰による自由な総合大学になることである。今でこそ一経済学部だけの単科大学的存在に過ぎないけれども経済学部だけでも、現在の経済学科と商学科の中で、法律学も経営学も会計学も最高度に研究することができる。電子計算機の導入、その他の人間工学的施設に力を入れ、やがて理工関係の学部が設置されることを今のうちから予想して建物の配置を考えている。

すべての教授が同じ目標に向かってともに進むところに、大学の協同体が成立する。背理と不安との中に孤立する友があっては大学ではない。私は、いつも瀬戸品野台に立つときに、仲間たちに呼びかけて、「幽玄啓明」という共通の理念を見出そうではないかという。ここにこそ、真の大学があるのである。」<sup>30)</sup>

ここには福田の大学ビジョンがいくつか掲げられている。まず、「学問の道のけわしさ」として「真理の追究」が挙げられているが、これは「幽玄啓明」の標語に要約されるのである。また、NGUは「福音主義キリスト教信仰」によるというのは、前記のようにキリスト教プロテスタントの聖書の改革主義の大学ということである。さらに、「自由な総合大学」は、自発的に成長し続ける総合大学ということだと考えられる。こうした三つの本学の特色がここには掲げられているのであるが、その他にもこれまで福田の諸発言を考察してきたように、本学の建学の精神の「敬神愛人」や名古屋学院大学の「名古屋」にもそれぞれの福田の重要な解釈が含まれているのである。

こうした本学のいくつかの特色は相互に緊密に関連していくことによって、いよいよ本学の特色を豊かな鮮明なものにしていくことが求められている。本学は、「幽玄啓明」に代表される「真の大学」であるのみならず、「敬神愛人」に代表される特色の鮮明な豊かな大学としてこの名古屋圏から高く広く飛躍していくことが神からの使命として求められていると考えられるのである。

### III まとめ

福田が、特に名古屋学院大学関係者に対して問いかけた根本的問題がある。

「人間の一生においても三つ子の魂百までという諺があるが、大学のような悠久の生命を持つべきinstitutionにしても、その誕生から三、四年の間に一つの魂が出来上がるのであって、それが長年月の間、その大学の精神、学風として続くものである。その意味において現在のわれわれが持っているものは極めて大切である。

教員、職員はもちろんのこと、1～3回までの学生諸君、来年入学する学生、これらの人々が共通に持たなければならぬ名古屋学院大学魂は何であるか？」<sup>31)</sup>

最後の「これらの人々が共通にもたなければならない名古屋学院大学魂は何であるか？」という福田の問いを念頭におきながら、本論文のまとめを整理したいと思う。

## 1. 福田における三元徳の特徴

I 1. 信仰について, 2. 希望について, 3. 愛について, を踏まえて, 特に4. 福田の信望愛の特徴, における要約が注目される。

「こうした福田における『信仰』と『希望』と『愛』についての解釈を通して, 福田の信望愛の特徴について指摘できるのは, まず, 『信仰』も『希望』も『愛』も神の(最愛の)ひとり子また救い主(王)なるイエス・キリストにそれぞれに関わっているということである。あるいは人生・生死の絶えざる出発点として, 目標として, また他者本位的な対象として, まず神の(最愛の)ひとり子また救い主(王)なるイエス・キリストに関わっている。それゆえ, 『信仰』と『希望』と『愛』はこうした十字架から復活されたキリストとの不可分な関係において, 『この三つは, いつまでも残る』(前出引用)。こうした意味において, 『信仰』と『希望』と『愛』はそれぞれとして不可分な関係にあることになる。

しかしながら, これらのうちで『愛』は, 神の(最愛の)ひとり子また救い主(王)なるイエス・キリストに関わっているのみならず, ささまざまな他者に関わることを可能にする。この『愛』は敵(すべての罪人なる敵!!)のために十字架上に生命をすてることも辞さないような他者本位の『最も大いなる愛』なのである。こうした『愛』を要約するものとして, 御子イエス・キリストを模範・導きとするべき, 二つの愛の戒めなる『敬神愛人』が示されていることについて福田も繰り返し触れているわけである。

こうした福田における信望愛は, またキリスト教のなかでもプロテスタント(新教)的な人格形成上の徳目であるといえる。他方, ローマ・カトリック教会(旧教)の教義では『七元徳』が一般に認められているのだが, それは聖書における信仰・希望・愛(対神徳)と古代ギリシア文化における知恵・勇気・節制・正義(枢要徳)という七つの基本的徳目を含んでいる。それに対して, 本名古屋学院大学や福田もその流れにあるプロテスタント(新教)では聖書における信仰・希望・愛は三元徳としてその基本的関係が認められているが, 他の徳目については一般に認められるには至っていない。プロテスタント(新教)は何よりもまず聖書を正典として重視しているのである。福田がそうしたプロテスタント(新教)の教会また大学においても多大なる貢献を尽くしたことは前述したとおりである。<sup>32)</sup>

## 2. 福田における名古屋学院大学のビジョンの特色

II 1. 「敬神愛人」について, 2. 「幽玄啓明」について, 3. 名古屋について, 4. 学院について, 5. 大学について, のそれぞれの特徴を踏まえて, 特に6. 福田の名古屋学院大学ビジョンの特色, が注目される。

「ここには福田の大学のビジョンがいくつか掲げられている。まず、『学問の道のけわしさ』として『真理の追究』が挙げられているが、これは『幽玄啓明』の標語に要約されるのである。また、NGUは『福音主義キリスト教信仰』によるというのは、前記のようにキリスト教プロテスタントの聖書的改革主義の大学ということである。さらに、『自由な総合大学』は、自発的に成長し続ける総合大学ということだと考えられる。こうした三つの本学の特色がここには掲げられているのであるが、その他にもこれまで福田の諸発言を考察してきたように、本学の建学の精神の『敬神愛人』や名古屋学院大学の『名古屋』にもそれぞれの福田の重要な解釈が含まれているのである。

こうした本学のいくつかの特色は相互に緊密に関連していくことによって、いよいよ本学の特色を豊かな鮮明なものにしていくことが求められている。本学は、『幽玄啓明』に代表される『真の大学』であるのみならず、『敬神愛人』に代表される特色の鮮明な豊かな大学としてこの名古屋圏から高く広く飛躍していくことが神からの使命として求められていると考えられるのである。」<sup>33)</sup>

### 3. 結論

#### (1) 福田における三元徳の特徴

福田における「信仰」と「希望」と「愛」とがいかに関わり合いつながりながらも深い関連があること、またそのなかでも「愛」が最も大いなるものであることについて福田もその要約としての御子キリストに基づく「敬神愛人」に繰り返し触れていること、そして福田のこうした信望愛は、福田が生涯通ったキリスト教プロテスタント教会での教会人としての立場から反映したものであるといったことなどについて、筆者も同じプロテスタント教会の牧師として改めて学ぶべき点が多々あったことは、驚きと感謝に堪えない。

#### (2) 福田における名古屋学院大学のビジョンの特色

1. 「敬神愛人」について、2. 「幽玄啓明」について、3. 名古屋について、4. 学院について、5. 大学について、のそれぞれの特徴を踏まえて、特に6. 福田の名古屋学院大学ビジョンの特色、において、こうした「本学のいくつかの特色は相互に緊密に関連していくことによって、いよいよ本学の特色を豊かな鮮明なものにしていくことが求められている。本学は、『幽玄啓明』に代表される『真の大学』であるのみならず、『敬神愛人』に代表される特色の鮮明な豊かな大学としてこの名古屋圏から高く広く飛躍していくことが神からの使命として求められていると考えられるのである。」<sup>34)</sup>

#### (3) 最後に

福田先生は、第一回卒業式式辞（1968/3/27）において、次のような口癖ともいえるメッセージを述べている。

「私が学生の頃に、最初に学びました経済学の書物で、アルフレッド・マーシャルが『人間の生活を根本的に動かすところの動因に宗教と経済がある』と、極めて簡単に書いてありますことは、若い私の心に一つのインプレッションを与えたのであります。真にそうである。そして、諸君は幸いにして、その二つの動因を結びつけたところの場で学ばれ、第一回の卒業生として出て行かれるのであります。」<sup>35)</sup>

その「人間の生活を根本的に動かすところの動因に宗教と経済がある」に関連して、本論は主に福田敬太郎における「宗教」や「大学」をめぐってしか述べることができなかつたが、福田における「経済」等についてはその専門の方々の御研究に期待したいと願うものであります。

改めて、福田先生は、さまざまな意味においてまさしく「本大学の父」<sup>36)</sup>であると筆者は痛感した次第である。(2021・8・31脱稿)

## 注

- 1) 16世紀以降のルターやカルヴァンなどの宗教改革によって、カトリック教会から分離したキリスト教諸教派の総称。「プロテスタント (protestant)」という総称は、その担い手達がカトリック教会(ローマ教皇を頂点の階層制)に抗議したことに由来する。日本ではカトリック教会(旧教)に対し、「新教」ともいう。この諸教派は、「聖書のみ」「信仰のみ」「万人祭司」を三大原理とする。すなわち、ただ(まず)聖書に証されているナザレのイエスを神の子(御子)・キリスト(救い主)として信じることにより、神の前の信徒間の平等(万人祭司・神の子たち)を確立するということを基本原理とする。  
F.C. クラインが所属していたのは、そのプロテスタント教会の一派であるアメリカのメソジスト・プロテスタント教会であった。そのメソジスト教会は、18世紀のジョン・ウエスレーに遡るが、英国教会の改革運動として始まっていった。「メソジスト(methodist)」とは法守家の意があり、聖書に示す方法(method)で生きることを重んじた。それまでのメソジスト監督教会に対して、クラインらのメソジスト・プロテスタント教会は、さらに監督(教職中)を置かない、教職と信徒間のより平等な、民主的な教会政治を求めて、「メソジスト・プロテスタント教会」として独立した。クラインらが誕生させた日本のメソジスト・プロテスタント教会(日本美普教会)は、1941年に日本基督(キリスト)教団に合同した。
- 2) 現在活動中の「敬神愛人の系譜研究会」の前身「福田敬太郎研究会」が活動し始めた2016年9月に福田ゆかりの日本キリスト改革派神港教会を訪問した際、当教会の役員の方々や御長男から福田ゆかりの日記やノートをたくさんお借りすることになった。それは、『福田敬太郎日記・ノート(全29巻)』として複製本化をして、現在名古屋学院大学瀬戸キャンパスキリスト教センター図書室に研究用として保管されている。
- 3) 福田は、日本キリスト改革派神港教会に教会籍を置いてその生涯の大部分を同教会長老・教会学校校長・同教派大会議長などを通して御尽力をされた。
- 4) 『聖書』「ヨハネの手紙一」1:1-4, 4:7-16, 「ヨハネによる福音書」3:16-21, 他を参照。
- 5) 『福田敬太郎ノート(I/13) 信望愛1967.4.2~1976.12.12』(福田敬太郎研究会, 2017年), 39頁参照。
- 6) 『聖書』「フィリピの信徒への手紙」3:12-21, 「コリントへの信徒への手紙一」15:12-58, 他。
- 7) 『幽玄啓明』(学校法人名古屋学院大学, 昭和五十五年), 50-52頁参照。
- 8) 詳しくは、注6)を参照。



## 福田敬太郎における三元徳と名古屋学院大学のビジョン

- 9) 『福田敬太郎ノート（Ⅰ/13）信望愛1967.4.2～1976.12.12』（福田敬太郎研究会，2017年），1-2頁参照。
- 10) 同書，70-71頁参照。
- 11) R. フラスリエール『愛の諸相—古代ギリシアの愛』戸張智雄訳（岩波書店，1984年），315頁他。
- 12) 「愛」（日本聖書協会・新共同訳），「愛」（日本聖書協会・聖書協会共同訳），という見出しがついている。
- 13) 注3）を参照。また，Ⅰの序文やⅢの3も参照。さらに福田は，1963-1970年の間学校法人四国学院（プロテスタント系）理事長にも携った。
- 14) 『幽玄啓明』（学校法人名古屋学院大学，昭和五十五年），14-16頁，などを参照。
- 15) 名古屋学院大学は，大学設立以後（1964・4-）も，名古屋学院からの法人分離以後（1973・3-）も，「敬神愛人」を建学の精神として継承した。
- 16) 『幽玄啓明』（学校法人名古屋学院大学，昭和五十五年），12-13頁，などを参照。
- 17) 福田のこの開学の式辞は，1964・10・15に述べられたので，1973・3の法人分離の8-9年前のものになる。
- 18) 本論文のⅡ 福田敬太郎における名古屋学院大学のビジョン，4. 学院についてを参照。
- 19) ちなみに，福田がそのMBA（経営学修士）を終了したハーバード大学のモットーは，Veritas（Truth）である。ハーバードは，キリスト教プロテスタントの伝統校であるが，そのアイビー・リーグの諸大学やイギリスのオックスフォード大学・ケンブリッジ大学など，米英の名門大学のほとんどはキリスト教主義の私立大学である。
- 20) 「名古屋学院時報」（昭和41年7月20日）『福田敬太郎ノート（Ⅱ/12）敬愛1964.4.15～1978.6.29』（福田敬太郎研究会，2017年），54頁参照。
- 21) 「名古屋学院時報」（昭和39年2月5日）『福田敬太郎ノート（Ⅱ/12）敬愛1964.4.15～1978.6.29』（福田敬太郎研究会，2017年），14頁参照。
- 22) 注16）を参照。
- 23) Wikipedia「学院」他を参照。
- 24) 『福田敬太郎ノート（Ⅱ/12）敬愛1964.4.15～1978.6.29』（福田敬太郎研究会，2017），52頁参照。
- 25) 同書，94頁参照。
- 26) 『聖書』「コリントの信徒への手紙二」4：16，「コロサイの信徒への手紙」3：10，など。
- 27) 『幽玄啓明』（学校法人名古屋学院大学，昭和五十五年），12-13頁を参照。
- 28) 『福田敬太郎ノート（Ⅱ/12）敬愛1964.4.15～1978.6.29』（福田敬太郎研究会，2017），9頁参照。
- 29) 福田敬太郎「わが大学を語る—旗幟を鮮明に 所信を勇敢に一」『蜚雪時代』（1966・12）は，『福田敬太郎ノート（Ⅱ/12）敬愛1964.4.15～1978.6.29』（福田敬太郎研究会，2017年），57頁に所収。
- 30) 福田敬太郎「わが大学を語る—ここに大学がある—」『蜚雪時代』（1968・8）は，『福田敬太郎ノート（Ⅱ/12）敬愛1964.4.15～1978.6.29』（福田敬太郎研究会，2017年），76頁に所収。
- 31) 『福田敬太郎ノート（Ⅱ/12）敬愛1964.4.15～1978.6.29』（福田敬太郎研究会，2017年），「第三回開学式式辞」，56頁参照。
- 32) 同論文，Ⅰ 福田敬太郎における三元徳 4. 福田の信望愛の特徴，から引用。
- 33) 同論文，Ⅱ 福田敬太郎における名古屋学院大学のビジョン 6. 福田の名古屋学院大学ビジョンの特色，から引用。
- 34) 注33）を参照。
- 35) 『幽玄啓明』（学校法人名古屋学院大学，昭和五十五年）「第一回卒業式式辞」，43頁を参照。
- 36) 『名古屋学院大学三十年史』（学校法人名古屋学院大学，平成六年），185頁。『名古屋学院大学五十年史』（学校法人名古屋学院大学，二〇一四年），131頁，参照。